

京都キリスト召団聖日集会

「己が身を献げる」

——ローマ書第8、10、12章——

2013年3月3日（京都）

奥田昌道

自分の限界を作らない 祈りの心で世に対する 献身とはキリストの御意に応えること 献身の前提 御霊に在る者の自由、生命の世界への大転換 ローマ人への書は「クリスチャンの身分証明書」「肉」に対しても御霊の主導権を 福音は万人のもの 御霊の宿り、御霊の執り成し すべてのご相働きて益となる キリストにしがみつく キリストを告白する 信仰は聞くことから始まる 主からの賜物を主のために 己を聴しとせず、すべての道で主を認める 祈り

【ローマ書8章】

1 この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。
2 キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、あなたを罪と死との法から解き放ってしまったからである。

3 肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣わし、肉に於て罪を定めたまえり。

5 肉に従う者は、肉のことを思い、霊に従う者は霊のことを思う。

6 肉の思いは死だ。霊の思いは生命なり、平安なり。

9 ……キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。

10 もし、キリストがあなたがたの内におられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊は義のゆえに生きているのである。

今はまだ完全な意味での贖い、全世界の贖い、自然界も含めた贖いはまだ終わっていないから、それが来ることを我々は待ち望んでいるのだ。

23 ……御霊の最初の実をいただいた私たち自身も、この肉体というものと天上の世界というもののギャップに、やはり喘いでいる、苦しんでいる。己が体の贖われんことを待っている。

25 ……見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。

26 ……御霊も我らの弱きを助け給う。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き嘆をもて執成し給う。

28 ……御旨によりて召されたる者の為には、凡てのご相働きて益となるを我らは知る。

34 誰が彼を訴えるんだ。誰が罪に定めるのだ。キリストは、神の右にいまし



て我らのために執り成し給うなり。

39 ……キリスト・イエスに在る神の愛、そこから私たちを引き離す者は誰も
ない。

【ローマ書10章】

9 あなたがたは、自分の口で、イエスは主であると言ひ表し、心で、神様は
死人のなかからキリストを復活させてくださったということを信じるなら、
救われる。

10 それ人は心に信じて義とせられ、口に言ひあらわして救われるなり。

13 すべて主の御名を呼び求むる者は救われるべし。

15 ……ああ美しきかな、善き事を告ぐる者の足よ。

16 ……イザやいう『主よ、われらに聞きたる言を誰か信ぜし』

【ローマ書12章】

1 されば兄弟よ、われ神のもろもろの慈悲によりて汝らに勧む、己が身を神
の悦びたもう潔き活ける供物として献げよ、これ霊の祭なり。

2 又この世に倣うな、神の御意の善にして悦ぶべく、かつ全きことを弁え知
らんために、心を更えて新にせよ。

3 われ与えられし恩恵によりて汝等おのおのに告ぐ、思うべき所を超えて自己
を高しとすな、神のおおのに分ち給ひし信仰の量にしたがい慎みて思う
べし。

8 或いは勧をなす者は勧をなし、施す者はおしみなく施し、治むる者は心を
尽くして治め、憐憫をなす者は喜びて憐憫をなすべし。

9 愛には虚偽あらざれ、悪はにくみ、善はしたしみ、

10 兄弟の愛をもて互いに愛しみ、礼儀をもて相譲り、

11 勤めて怠らず、心を熱くし、主につかえ、

12 望みて喜び、患難にたえ、祈りを恒にし、

13 聖徒の欠乏を賑し、旅人を懇ろに待せ。

14 汝らを責むる者を祝し、これを祝して詛うな。

15 喜ぶ者と共によろこび、泣く者と共になけ。

16 相互に心を同じうし、高ぶりたる思いをなさず、反つて卑きに付け。なん
じら己を聴しとすな。

【箴言第3章】

1 わが子よ、わたしの教えを忘れず、



わたしの戒めを心にとめよ。

²そうすれば、これはあなたの日を長くし、
命の年を延べ、あなたに平安を増し加える。

³いつくしみと、まことを捨ててはならない、
それをあなたの首に結び、心の碑にしるせ。

⁴そうすれば、あなたは神と人との前に
恵みと、誉れを得る。

⁵心をつくして主に信頼せよ、

自分の知識にたよってはならない。

⁶すべての道で主を認めよ、

そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

⁷自分を見て賢いと思つてはならない、

主を恐れて、悪を離れよ。

⁸そうすれば、あなたの身を健やかにし、

あなたの骨に元氣を与える。

⁹あなたの財産と、

すべての産物の初なりをもつて主をあがめよ。

¹⁰そうすれば、あなたの倉は満ちて余り、

あなたの酒ぶねは新しい酒であふれる。

¹¹わが子よ、主の懲らしめを軽んじてはならない、

その戒めをきらつてはならない。

¹²主は、愛する者を、戒められるからである。

あたかも父がその愛する子を戒めるように。

●自分の限界を作らない

みなさん、おはようございます。

先週は、私を含めて20人の方がお集まり下さって、にぎやかでした。今日は、男性は私を除いて3人、女性は10人。この集会は女性の方が優位なんです。男性の方は、それぞれ、ご用事とか、あるのかもしれない。日曜日に出てくるのが大儀だとか、それは、「肉」の思いではきつとそうだと思います。でも、そんなことを言われたら、私の立場はどうなりますか。否応なしに日曜日は恒常的にここで集会をやっているわけですよ。そういうことも、ちよつとは考えてもらわないと（笑）。

ここ一週間、私にもいろんなことがありました。私はこのところずっと風邪をひいてましたから、先週も相当しんどかったのですが、風邪も吹っ飛ぶような感じでここ（集会）



では燃えておりました。それで、S兄が集会だよりに、

「近頃の先生は本当にお元気で」

と書いてくださった。そのように見えれば、それは大変ありがたい。S兄が先週の集会の様子を非常に素直に書いてくださったつて、私はとても嬉しく思っております。

先週お話しした100歳を過ぎても元氣な方々の新聞記事を、もういちど資料で確かめました。その中に、おひとりで108歳の方と、102歳と100歳のご夫婦がいらしゃった。その新聞記事に、私は刺激を受けた。100歳を過ぎて元氣な人たちに負けたらクリスチャンの名折れだと。前に、「あと十年の命」と言っていた言葉を撤回し、無期限、期限の定め無しと改めた。ということは、明日かもしれない。100歳かもわからない。それは神様に完全に委ね切つて、自分で設定しない。そういうことですから、主の御意であれば100歳まででも生きる。いつ天に召されてもよい覚悟でいくということです。

そういうわけで、天に召されるまで生命力あふれる元氣な姿でいるために健康面に配慮して、いままで夜型生活だったのを朝型に変えることにしました。徐々に変えつつあるんですよ。でも、今日の集会の準備作業をしていると、やはり12時を回ってしまいました。それでも、ちゃんと今朝は7時半には起きています。朝型に変える、これは絶対にやります。それから、故障している足も治して、イザヤ書40章のような、

「主を待ち望む者は新たな力を得、鷲のように翼をはつて、のぼることがで

きる。走つても疲れることなく、歩いても弱ることはない。」（イザヤ40・31）

そういう姿を実証したい、そういうことなんです。

それから、私は、小池先生のものにせよ、パウロの書簡にせよ、キリストの言葉にせよ、読めばぴーんと流れ込んでくるということを、最近体験しています。先生はキリストの霊を受けて本を書かれた。パウロはやはりキリストの霊に導かれて手紙を書いた。キリストご自身は聖霊に溢れておられた。そういう方々の言葉や書を読むということは、直ちに、それを書かしめ生かしめている霊をいただくことであり、そのことを私は体験しているのだと。いわゆる見える形での、いわゆる劇的な聖霊のバプテスマという、そういう聖霊体験がなくても、

「読めば直ちに流れ込んでくる」

という、そういうことになるということとは、私の中に聖霊がしっかり宿っている証拠ではないか。そういうことをS兄弟は書いてくれました。私は全くそのとおりだと思っています。

復活節集会の案内のところを読んでいます。

「今年2月28日で奥田幸子姉妹^{ゆきこ}を天に送つてちょうど1年となりました。その2月

28日に、幸子姉妹がかねてから願っていた、奥田宅集会所から一軒南隣の住宅を取得することができ、京都キリスト召団の伝道活動、集会活動の将来の拠点を確保することができました。古い家屋ゆえ、年数をかけて整備する必要がありますが、



祈りを深め、いよいよ御霊の火に燃やされて、主キリストの導きの下、前進してゆきたく願っております。」

これは、全く、私の正直な気持です。2月28日にすべての引き渡しと決済が終わりました。そして、私の個人の生活で言いますと、「法学セミナー」というところから700号記念特集号への寄稿を求められておりまして、1万字から1万1千字ということで——1万字というと半端じゃありませんね——私はこれを仕上げた。A4で約8枚です。これは、2月24日に皆さんとここで奥田幸子姉妹の記念集会をやって——やはり翌日はちよつとしんどかった——その翌日の夕方くらいからパソコンに向かいました。向こうからは催促してくる。

「大丈夫でしょうか。3月4日の締め切りが近づいておりますが」

と。私は、25日の夕方から26日、27日の夕方に8割方すませました。そして、28日に銀行で決済が終わって帰宅してからすぐに続きをやって、そして、その日に編集者の方に送りました。これは、私にとって奇跡です。本当に奇跡です。

キリストは、46年もかかって建てた神殿について、

「これをこわしても三日で建ててみせる」

と言われましたね（ヨハネ2：19、21）、ご自分のご復活のことをあらわして。

私にとっては、自分の体調もまだそれほど良くない時に、しかも他の予定も詰まっているときに、締め切りの原稿を締め切りより早く、しかも、幸子姉妹が亡くなった1年記念の日に仕上げて、夕方ぱーんと送りました。これはもう私にとって、嬉しく、ありがたく、

「こんなことができるんだ。できたんだ」

という、これは自分の力ではありません。絶対に導きですね。もちろん、材料はその前に心掛けて用意はしておいたんですけれど。

ですから、皆さん、本当に自分で限界を作らないでください。やらないでいいことは放っておいたらいい。でも、「書きます」と引き受けて——10月にこの話は来ていた——だから、私は自分で大体のメモを書いて編集長に見せて、

「このようなものでいいのでしょうか」

と言ったら、

「その線でやってください」

と編集長が励ましてくれました。

●祈りの心で世に対する

そうは言いましても、私が書くものは、普通の法律家のかたが書くものとはちよと違います。こころの世界を書きますから。そういうものが果たして編集の企画の趣旨に添うのかどうか、非常に不安でした。だから、私はこれ（原稿）を送った時も、

「こんなんでよいのであれば採用してください。しかしそれは、私には全く自信が



ない」

ということを書いた。結びのところにも、

「以上、この記念特集の企画に沿う内容であるかどうか、はなはだ心許こころもとないが、所感を綴ってみた」

というふうに書いた。私はいつも、自分には全く仕事において自信がありません。もう、自信満々でやられる方が羨ましくしてしょうがない。だから、祈り心で、

「こんなんでもいいんでしょうか。よかったら、採用していただいたらいいし、だめだったら、それで結構です。しかし、もう今後は私に文章を頼んで来ないでください」

と、そういう気持です。昨日、ちょうど、ある研究会にその編集長も来ていました。それで、コピーを渡したんです。彼からは、パソコンで送ったあとすぐ、

「ありがとうございます。週末にかけてじっくり拝見して、それでまた自分の感想を述べます」

というメールが来た。そして、読んで、これで大変結構だと言ってくれました。

だから、私は何をやつても、「自分でやった」とか「自分にそれだけの力があるからやった」とか、絶対に思わない。本当に真正正銘、そうです。それで、それを受け入れられたら「ああ、よかった」と、それだけなんです。私は、クリスチャンとして責任は果たしたいという気持です。しかし、クリスチャンとしてこの世に對しているときに、どうしたって、考え方とかがこの世の原理とは異なります。だから、この世の人たちが喜ぶような内容は書けない。そういうことで、いつも私はどんなことをやるにしても、そこに格闘があるんです、戦いがある。外へは出しませんが、それで拒絶されたらやむを得ない。しかし、受け入れてくださったらありがたい。そういう思いで、何事もやっています。

●献身とはキリストの御意に応えること

まあ、そんなことがこの一週間でした。28日は本当に雲ひとつ無い快晴でした。暖かくてね。これは実に不思議な思いがいたしました。そして、無事に銀行での決済は、かなりきちつとした書類を交わしたり、非常に丁寧にやってくれました。それで、そちらの方も片付いて今日に至っていますので、この一週間、あるいは私にとっての、1月の中頃から今日に至るまでのほぼ40日というのは激動というか、モーセの荒野での40日にも匹敵するような思いで過ごしてきました。

しかし、申し上げておきたいのだけど、さきほどM兄がいろいろ証言されましたけれど、やはり私は、一つ欠けているところがあると思う。

「自分はと思う。自分は思う。自分の判断は、昔はこうだったけれど、今はこうだ」



という、そこをさらに突き抜けて、

「キリストは私に何を求めておられるか？ キリストは何を求めていらっしゃるのか？ キリストの御思いにただ応えたい」

と、そこへ徹してほしい。この世的な幸いも不幸も、そんなものを突き抜けて、

「キリストは私に何を求めていらっしゃるのか？ キリストは私をどのようになさっているのか？」

常にその一点。この集会の方々はその中に徹していただきたいと願っています。でないと、まだまだ不安定です。もう私はそういう角度ではありません。

「キリストは何を願っていらっしゃるのか？ キリストは私をどのようになさっているのか？ それにどうやったらお応えできるんだろうか？」

と。今日の題の「己が身を献げる」というロマ書12章、そこへ入っていくんですけど、これは縮めれば「献身」、身を献げることです。

私は、宣教師の教会に居ましたときに、「献身、献身」ということを何度も言われました。その教会で献身というのは、牧師になること。牧師の道。つまり、神に献げるということは、この世の職業から離れて神学校に行つて、伝道者になるということが献身なんです。私は、それに非常な疑問を感じた。

「それしかないのか。もちろんそういう道もある。しかし、そうでなくて、すべてのキリスト者は全部、いままでの自己中心の原理から解き放たれて、神中心、キリスト中心に動く。キリストは何を求めておられるか。それぞれのところでどのようにして主の栄光を現していくのか。それが献身だ」

というふうに、だんだんと思うようになりました。

しかし、そのようなことを言ってくれる人は誰もいない。献身というのは、この世の職業を離れて、聖職者というかな——カトリックだったら聖職者ですし、プロテスタントだったら牧師の道——それに身を乗り出して行くことであつて、そこへ乗り出さないでこちら岸に留まっているのは献身ではない。他の教会でどう教えておられるか知りませんが、私も、私が通っていた北欧系の宣教師の教会では、そんなふうに言っていた。現に、そうやって熱心になった者は神学校に行きましたよ。それを讃えるわけですね、「立派な信仰です」と。では、そこに残っているのはみんなカスかと。残っているやつはみな献身できない。まだ自分にしがみついて、献げていないのかと。当然そうなりますね。そんなはずはないと一方で思いながらも、私はまだ日が浅いですから、葛藤がありました。

それで、やがて3年後に小池先生に出会った。それで、広やかな世界に、本当に広やかな世界に押し出された。どぶ池みないな小さなところから、大海に押し出された。ああ、この広大無辺な広々とした大海に、

「神における自由で行きなさい」

というわけです。とても、私はそのころは、「神における自由」なんて全然、私には縁遠い



世界でした。「神における自由」というのは聖歌(574)「恵み深きみ神よ」の中の、

「君の深き恵みを語り告ぐるために、

神によれる自由を今日も与えたまえ」

という句です。

● 献身的前提

ロマ書の方に入りたいと思います。

皆さん、本当に燃えてくださいね。体が病んでいても、しんどくても——それはそれとしていいですけども——でも、内に燃えている。燃やしていただく。これは燃えるんじゃない、燃やしていただくんです。やはり火をつけてもらわないと。

私も、そのようなことでこの一週間、ほとんど聖書を開かなかった。昨日初めて、

「あ、集会や。聖書を開かないかん」

と、ロマ書を開いたら、もうわーっと、まるで吸い取り紙がインクを吸い取るように、乾ききった土地に真清水が染みこむように、すーっと流れ込んできた。全然、その空白というか、それまでの五日間ほど聖書も開けず、そういうのを感じなかったけれど、すーっと流れ込んできた。まあそんなことがありました。

では、ロマ書の12章からいきます。

1 されば兄弟よ、われ神のもろもろの慈悲によりて汝らに勧む、己が身を神の悦びたもう潔き活ける供物として献げよ、これ霊の祭なり。

2 又この世に倣うな、神の御意の善にして悦ぶべく、かつ全きことを弁え知らんために、心を更えて新にせよ。」(ロマ12・1-2)

まずは基本的にこういうことを言って、それから、3節からは、それぞれ集会の中での在り方をずうっと諄々と説いてくれています。しかしながら、私は申し上げたい。

「己が身を神の悦びたもう潔き活ける供物として献げよ。これ霊の祭なり」

と。礼拝というのは、そういうことだと。毎日が礼拝なんです、そういう意味では。これが本当に成り立つには、前提が必要です。これを文字通り自分の力でやってやろうと思つたら、それはだめです。そうさせてくださる原動力が必要です。その原動力はどこから来るかというのを、ロマ書の8章から皆さんと味わってゆこうと思います。

ロマ書8章というと、とても難しそうに、皆さん、思われるでしょう。私もかつて、そう思いました。でも、今朝もういちどこれを読み直して、

「なんだ、こんな易しいことを言っているのか。これはもう当たり前のことを言うてくれているじゃないか」

と、そう思いましたよ。御霊に導かれるならば、現にいま御霊に導かれている人がこれを読むならば、



「こんなの当たり前、この通りです。私だつてこれくらいのことを書きますよ」と。そういう思いにならないと、読めていない。

だから、私は、これから関西弁でやりますから。いいですか。

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。」（ロマ8・1）

さつき、聖歌を歌いましたでしょ。

「罪とがを許るされ 神の子となりたる」

この「なりたる」はまずい。「せられたる」「神の子とされた」と私はそう言つてほしい。

「罪とがを許るされ 神の子とせられたる

わがたまの喜び 比べうるものなし」（聖歌232番）

まず、出発点は「許されて神の子とされた」ということ。全部これ、受け身なんです。やつてくださったのは、神様ご自身です、キリストを通して。それがまず出発点です。私はさつき、

「神様の御意、^{みこころ}キリストの御意は何でしょうか。それに従つて行かせてください」

ということを行いましたけど、それを言うためにはその前に、こうやつて神様の側で、キリストを通して全部お膳立てをしてくださった。それがあから行けるんです。

このお膳立てなしで行こうとしたのが、旧約の世界です。旧約の世界は、神様と一対一で向き合っていますから、対等と言えば対等なんです、神様と。しかしながら、向こうは絶対者でしょ。こちらは罪深き人間なんです。そんなもの、敵^{かな}うはずがない。それでも、

「対等でやります」

と言つて、イスラエルの人たちはモーセに率いられて行つた。律法を与えられた時も、

「お前たち、これをやるか？」

と言われて、

「やります」

と答えた。

「律法を守るならば祝福がある。律法に外^{はず}れるなら呪いがある。お前たちはどっち

だ？」

と言われたとき、

「はい、やりますー！」

と言つて、皆「エイエイ、オー！」とやったわけです。ところが、実際になつてみると、もう散々なことでしたね。ところが、そういう人間どもにとつて、

「今やキリスト・イエスに在る者は、罪に定められることがない」という。

「キリスト・イエスの中に抱^{いだ}かれて在るという、それが無ければ始まらんよ」



ということ。それを言うために、1章から7章まで諄々と説いてきたわけです。1章から7章までは、この8章に行くための準備だった。それで、諄々と説いてきて、

「こういうわけで、今や、キリストに在らしめられて在る者は……」

と。「キリストの中に在る」とは、自分たちが自動的にキリストの中に在るなんて、そんなこと言えませんもの。キリストが何もかもやってくださったんだから。罪とがを許し、汚いものを全部取り払って、

「さあ、お前は神の子だ。お前は私が愛する子だ。いいね」といって、向こうからすべてをやってくれた。いいね。

赤ちゃんが生まれてくる時がそうですね。赤ちゃんは自分では何もしていませんよ。そうでしょ。胎に宿った時から、オギャーと生まれて来るまで。それは赤ちゃんは、ヘソの緒を通して命の栄養を頂いてはいたでしょう。でも、全部与えられたものです。そして、わーっと押し出してもらって、心地よいお腹の中からこの汚れた世へと押し出されて来たわけです。けれども、生まれてきた時には、普通は全部が備えられていた。産着もお湯も全部あって、「ああ、よく来た」といって迎えてもらう。それが、正常な赤ちゃんの誕生ですけれども。

私たちは、そうやって、キリストというお方が多大の犠牲を払って、本当にすごい犠牲を払って、そして御自身の中に抱き取ってくださった。

「そういうキリストに抱かれて在る者は、キリストが抱いてくださったっているお前は、もう罪には関係ない。断罪されるなんてあり得ない。キリストが全部引き受けたのだから、もうお前は、自分で責任を取ることなど何もないよ」

というのが、この第1節ですね。

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定められることはない」と。

●御霊に在る者の自由、生命の世界への大転換

こういうのをお読みになったとき、皆さん、どうですか。

「ああ、そうですか？」

ではない。

「ああ、そうですよ！　そうですよ！　そのとおりですよ！」

と、ここで膝を叩かなきゃいかん、講談師みたいだね（笑）。

「そうですよ、パウロさん、本当にそのとおりですよ！」

と。そして、パウロは理由をちゃんと書いてくれているんです。

「²キリスト・イエスに在る生命^{いのち}の御霊^{みたま}の法^{のり}は、あなたを罪と死との法^{のり}から解放^{はな}つてしまったからである。」（ロマ8:2）



もう終わっているんです。キリスト・イエスの中に充滿している生命の御霊の法、それがおまえさんを捕まえている。キリストに関わりがないときは、罪と死の法にからみつかれていた、大蛇がとぐろを巻いて締め付けるように。それでもう青息吐息、息も絶え絶えだった。そこから解き放つて、生命の世界へと我々を転換さしてくださった。これも、

「キリスト・イエスに在る生命の御霊の法」

があなたを解き放った。自分じゃない。キリスト・イエスの中に働いている生命の御霊の法です。キリスト・イエスという方の中に、生命の御霊の法はずっと働きつばなしで働いていましたよ。だから、あんないろんな不思議な御業が現れた。御言葉は素晴らしかった。たとえば、十字架を荷われて神様から突き飛ばされたときでも、この生命の御霊の法は絶対に働いていたはずですね。死を味わわれたけれども。黄泉にまで下って、そこで救い上げられたですよ、苦しんでいる者たちを。そして、ご復活という姿で、栄光の姿になって現れて来られた。これは、キリスト・イエスの中に働いている生命の御霊の法が全部、それを全うしてくださったんですね。キリスト御自身も、自分の力ではない。それは御霊に委ね切っていたらいいと思います。

キリスト御自身は、ヘブル書で読みましたように、

「この世におられた時は、涙と叫びをもって、己を死から救い得る神に自分を

訴えられた」（ヘブル5:7）

ということが書いてありました。ゲッセマネの祈りもそういう面がありましようし。

この、キリスト・イエスの中に働いている生命の御霊の法が、ご自分を復活へと導いたのみならず、我々をも罪と死から解き放って、あのキリストの復活の生命と同じ姿に、我々を化してくださる。その土台を作ってくださいました。

そして、3節からは、ここに難しいことを書いています。

「³肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣わし、肉に於て罪を定めたまえり。」（ロマ8

・3）

これは私だったら、

「生まれながらのあんたらは、生まれながらのわいらは、なんぼ神さんの要求を満たそうと思っても、あかんのや。そんなん、無理や」

「何でやねん？」

「我々の生まれながらの思いは、神さんより自分の方が大事や。そっち（自分）を取るやんけ。そんな者に『神様の御意を為せ』と言うても、そら、無理や。どだい、あきまへんわ」

と。これが大阪弁ですよ。ね、そうでしょ（笑）。

「肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり」



「^{おきて}律法」というのは、神様の御意の現れです。「^{おきて}律法のなかの律法」というのは、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、全力を尽くして神様を愛せよ」というのがひとつでしょ。それから

「己の如く、汝の隣人を愛せよ。隣人を本気で愛せよ。この二つだ」

とキリストは言われた。これが神様の律法なんです。神様が求めておられることは、全然無茶なことは言っておられない。本来そうあるべき姿なんだけれども。でも、「肉」は自己中心ですから、神様よりも自分です。

「もし神様が居るんやったら、おれを助けてくれる神様なら信じてやつてもいい。聞いてくれへんかったら、捨てるで」

という。それが自分です、「肉」でしょ。それから、

「隣人？ わしが満腹して余ったら、あげるわ。わしがひもじいのに、なんであいつにやらなあかんのや」

これが、「肉」でしょ。そういう点では、コルベ神父なんてのはすごいですよ、ナチスに囚われて。あれは本当に神の人ですからね。でも普通はそうじゃない。ですから、ここに書いてあるのは当たり前のことが書いてある。

「生まれつきの人間がやれるはずがないわ。やれるはずがない神の求めなんて無茶苦茶やんか。そんなもんできつこないやんか」

と。それを神様ご自身がやってくださった。キリストというお方を、イエスを送り込んで、そして、あのお方が全部それを引き受けてくださった。我々、神様の御意に^{かな}適いっこない人間が当然受けるのは、罰ですね。

「罪の支払う報いは死なり」

と。しかも、ひよつとしたら、永遠の死、地獄までの永遠の死——肉体だけの死ではない、魂の死——そこまで行きそうなところを、キリストが全部引き取ってくださいました。

「おれたちのできんことを、神さんがやってくれはったんや。ほんまやで」

と。そもそも、肉に従って歩いていたら、自己中心な旧い自分に従って歩いていたら、その行き先は決まっている。それは、死や。でも、神様中心の歩みは、生命や。でも、我々は、放っておけば必ず肉の思いで自己中心で、死の道を選んでしまう。それしか、行きようがないんやと。それが、

「⁵肉に従う者は、肉のことを思い、霊に従う者は霊のことを思う。⁶肉の思

いは死だ。霊の思いは生命なり、平安なり」(ロマ8・5〜6)

と。その通りです。

「肉」の思いは神に逆らう。「^{おきて}律法」というのは「^{みこころ}御意」と言い直してもいい。神様が我々に望んでおられる御意、それに従えない。従わないどころか、従えないんです。無理なんです。自己中心の旧い人間は、神様に喜んでもらおうなんて、無理や。そうでしょ、その通りや、



無理やと。

●ローマ人への書は「クリスチャンの身分証明書」

しかし、ここで180度ひっくり返しているんです。

「あんたの中に、御霊、来てるやんか。あんたの中に、御霊、来てるやろ。だから、あんたは、もう肉の人間じゃないよ。霊の人だよ」

と。ここで大転換が起こっているんです。これと

「キリスト・イエスに在る生命の御霊の法が、あなたを解き放した。」（ロマ8・2）

というのは、いっしょですから。

「あんたの中に、聖霊きてるやん」

「え、ほんま？ そんなことあるの？」

「そら、そうや。そのためにキリストは死んでくれはったんやないか。キリストが死んでくれはったのは、あんたの中に宿るためやんか、聖霊となつて」

「いやあ、そんな感じ、せん」

「そんな感じる、感じへんの問題とちやうや。神様が『こうや』と言われたらそうなんや」

ロマ書を読むということは、

「あんたの本質は、これやで」

ということを言ってくれている。自分の頭で、

「自分は何十年信仰してきたから、どうだ」

とか、そんなくだらないことを考えたつて、始まらんです。このロマ書のここを読んだら、

「あんたはこういう人やで。いままで気いつかんかったやろ。でも、神様の目から見たら、あんたはこういう人間なんや。そうされてしもうたんや。キリストがしてくれはったんや」

「はあ、ありがたいことでんな。なんぼ払ったらよろしおまんの？」

「阿呆。関西人は、すぐお金で勘定する。そんなもん、お金で買えられるか。この

どあほう！」

そうでしょ（笑）。いや、そのぐらいの伝道をやつてほしいわ、難しいことばかり言わんと。ほんまにな。「奥田漫才師によるキリストの福音口演会」なんてね（笑）。

やはり、そうやって、私は、関西人、大阪人の中に福音が浸透してほしい。何せ、関西人は実利を取りますからね。

「実利以上のものがあるんやで、金で買えへんものがあるんやで。わかつとるんか、このあほうが」

とか——「このあほうが」は余計ですが——本当にそうなんです。我々の自分の血肉、日



常性の中に福音を取り込んでしまう。なにか難しい、神学者が書いたえらい「ロマ書講義」なんて、そんなのとちゃう、あんなもん蹴飛ばせと。

「神の御霊が、あんたの中におるやんか。宿ってはるやんか。ほんなら、あんたはもう、肉の人間とちゃう。神の人やで」

「へえ、そうでつか。ありがたいことだな」

「そや。そのためには祈ってなあかん。御霊が宿ってはるから大丈夫なんて思ったらあかん。やつぱり、そこが祈り心や。御霊に助けてもらって祈らなアカんで」

そこから始まっていくんです。ベースを作ってくれはった。スタートラインに立って「ヨイ、ドン」と走れる原動力、御霊が来てはる。そしたら、その聖霊を大切に、

「御霊の主さま、お願いしまつせ。御霊の主さま、今日もお願いしまつせ。よろしゅうにな」

と。

「そもそも、あんたの中に聖霊が宿ってくれてはるんや。御霊がいなかったら、あんた、クリスチャンとちがう」

と、そう書いてあるんです。

「9……キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。」（ロマ8・9）

というのは、私流に翻訳したら、そうなんです。

「あんたの中に、御霊が宿ってくれてはるねん。そうやなかったら、あんた、クリスチャンとちがうねん」

「どないして御霊は来てくれはったん？」

「それは、あんた、知らんうちにちゃんと十字架にかかって、あんたの今までのマインスを全部ひつかぶって、苦しんでくれはったんや。苦しんで苦しんで、それで、あんたを解き放ってくれはったんや」

「いやあ、ありがたいことだな」

「そうや、それを忘れたらアカん。だから、こうやって、御霊のキリストがいてくれはったら——あんたの体は^{からだ}どうせ死ぬわ。これはしゃあない。肉体の法則は、今は115歳が最高みたいや。しゃあない——でも、霊は生きてまつせ。魂は生きてまつせ。しかも、御霊のキリストが宿ってはったら、体かて元気になりまつせ。108歳に負けまへんで」

と。こういうことを書いてあるんです。

「¹⁰もし、キリストがあなたがたの内におられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊は義のゆえに生きているのである。」（ロマ8・10）

「御霊のキリストがあなたがたの内にいらっしやるんだから。体はもうしょうがな



い。罪のために死んでいる。これはしょうがない。でも、霊は、キリストの功いさおの故に生命の中にあるんやで——「あらん」ではない——あるんやで。そして、その御霊が宿ってはったら、生きざるを得んやんか。御霊によって死ぬべき体も生かし給う、と書いてあるやんか。108歳に負けたらあかん」

と（笑）。こういう生き方が、さっきの聖歌の、

「日もすがらあかしせん 夜もすがら主をほめん」（聖歌232）

ということが自ずと出て来るんです。

「賛美せなあかんのですか、証しをせなあかんのですか」

とか、そういうふうな発想ではなくて、

「こういうことを本当に知ってしまったら、万歳、万歳と言わな、いかれんやんか」

と。だから、そういう気持ちになれるのは、こういう聖言に触れたときになるんです。私は、忙しくて五日間、聖書を開けなかった。でも、開いたら、ふわーっと流れて来た。

「ああ、これや、これや。このとおりや」

と。だから、私の中にはいつも賛美が流れているんです。

「日もすがらあかしせん 夜もすがら主をほめん」

と。特にこの聖歌の3番のところですね。

「感謝なき日はなく 賛美なき夜はなし」（聖歌232）

昼は感謝、夜は賛美。これが私の中で絶えずリフレインして鳴り響いていたから、今日はこの聖歌を選んだ。「昼は感謝、夜は賛美」、これは自ずとそうなってしまう。

だから、どうぞ、ご自分の発想で、

「自分は、今までの人生を振り返ってこうだった」

という、そういうふうなことから結論を出すのではなく、もうそれは捨てて、

「神様は、こういうふう私のことを見て下さっている。こうして下さっている」

と、そういう角度から見たら、

「過去はいろいろ苦しいこともあったけれど、それもプラスなんやなあ。それも、今日の喜びのためにちゃんと与えてくださった試練だったんやなあ」

と。こういうふうになつてくるんです。やはりその恵みの場から振り返らないと。ただ振り返って、

「苦しいこともあった。楽しいこともあった。そして、今はこうだ」

というのではなく、

「まず主さまがこれだけのことをしてくださった。あんだ、こんなすごいことになつてるんやで」

「へえ」

「あんだ、今は貧乏暮らししか知らんけど、神様の方には富がたくさんあるんや。あ



んだ、今は窮屈な家に住んでるか知らんけど、天には御殿がいっぱいあるんや。『私は、ところを備えに行く』と言ってくれはったんや」

そういうふうにして、主が私たちのためにしてくださったことは、

「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、

主は、してくださった」(コリント前2:9)

と、そういうことなんですね。これは普通の人はわかんんですよ。言っても、ポカンとしていただけですよ、あまりにも凄^{すじ}すぎて。でも、それを我々は実証して、体現して行く。

「聖書にこう書いてあるから」

ではなくて、

「聖書は、私が思っていることがそのまま書いてあるんや。聖書と私とはもう、一つなんや。パウロさんと私は一つなんや。私は口下手^{べた}やけど、パウロさんがすごいことを言うてくれているから、それで、それをもって私は告白するんや」

と。こうやって、皆さん、開き直って、

「いや、あまりにも違いすぎるんや。しょうがない。あまりにも違いすぎる。あんまりでかすぎて、この世の人の頭には入りきれんのや」

と。

「人あらたに生まれずば、神の国を見ること能わず。人は上から生まれなければ、神の国に入れない」(ヨハネ3:3-6)

と。ちゃんとキリストはおっしゃっている。この地上の人生の延長上にあるものではないんです。そこで、ある時、断絶が、大転換が起こっている。大革命が起こっている。それだけの自覚を、皆さん、お持ちいただきたい。それは「恵み」なんです。こちらに何の功^{いさお}もない。それを「恩恵^{めぐみ}」という。こちらの功で獲得するのは、「報酬」です。我々は、こちらに何の功もない。プレゼント、恵みの賜物^{たまもの}なんです。

そうしたら、本当に今どういう状況に置かれようが、それを離れて進む。なにかリニアモーターカーというのは、ちよつと浮くそうですね。あれは線路の上を走っているようでありながら、浮いて飛んでいるんですってね。我々はそれで行くんですよ。地上にべったりとしがらみに絡^{から}みつかれているのではなくて、浮いているんですよ。御霊に、聖言に触れたら、浮かされて、そして進んで行くんですね。

そういうことを、皆さん、本当に日常生活で実感してください。

「なんや、お母さん、このごろニヤニヤしているな。何があつたの？ 何ぞええこ

とあつたの？」

「いやあ、すごい宝に出会ったんや」

とか言ってるね。そういう、私は、クリスチャンがうれしくて、のびのびして、幼子^{おさない}の姿、幼子^{おさない}が喜んでいる姿、それを取り戻してほしいんですよ。「ロマ書は堅苦しい本だ」なんて、



そんなことは思わずに。私（奥田）流にやったら、全部解けるでしょ。そのとおりでしょ。

「ロマ書は、私の身分証明書や」

って、いつも言うんです。

●「肉」に対しても御霊の主導権を

そして、われわれがどうやって生きていくのかと言えば、やはり、「肉」も現にあるのだから、この体からだというのがあるのだから、体は体の要求を持つておる。腹がへったら、「食いたい」と言うし。人間に性欲とか食欲とか、いろいろな欲がある。それで体は生きていますけど、しかし、それに支配されたらあかん。それを無くせとは言わない。支配されてはあかん。御霊が主導権を握るように。私はそう思うんです。

完全に肉の欲求を切り捨てたら、死にますよ。これは体は生きて行けないですよ。食欲、性欲、いろんな欲があつていいんです。ただ、それに縛られて、その虜とりこになったらあきませんよ。やはり御霊が主導権を握つて、そこにちゃんと秩序を与えている。このところは、ものすごく大事ですよ。

なんか宗教といいますと、とかく肉体を苦しめたりとか、断食をやつて千日回峰なんていうのは大変な行です。私はやらない。やる必要はないですよ。肉体を苦しめたり、何かすることがいかにも修行だというふうに取りがちですけども、そうではない。我々は、主導権を神様の霊が握つてくださっている。それに自分を預けていく。そのことによって、躓つまずきやすい自分をも、まっすぐな道にリードして行つてくださる。だから、思い上がつてはあきません、傲慢になつたらあきませんよ。絶えず平伏ひれふしです。従順でありなさいよと。従順であることが、御声を聴いているということだから。

そういうことで、我々は肉体をまもつてこの地上で生きている限りは、確かに絶えず葛藤があります。戦いがあります。でも、それでヘトヘトになつてはだめなんです。委ね切つて行けば、ちゃんと御霊が主導権を握つて、私たちをまっすぐな道に歩ませてくださる。

それを謳うたっているのが詩篇なんです。詩篇の119篇なんていうのは、「イロハ」を歌っているんです、「ABC」のアルファベットの順で。

「たえず聖言みことばによって私を導いてください」

とか、

「聖言みことばとあなたの論さとしが、私を正しい道に導きます」

とか。まだ聖霊をいただいていないあの人々がやはり、

「自分がどうやって神様の御意みこころに適かなうようになるか。それには、聖言みことばに従つて

歩むしかありません」

とか。非常に聖言みことばというものに自分を委ね切つて歩んでいます。ましてや、私たちは、その本当の聖言の実体であるキリスト様をいただいた。御霊の主が私たちの中に宿つてくだ



さっている。そのお方が主導権を握ってください。

御霊の主が宿ってくださいるのは、本当に十字架です。十字架を本当に祈り心で受けとっていきますと、その時に御霊は宿ってくださいているんです。聖霊のバプテスマというのは、それが爆発的に全身を貫くときの体験なんではないかと思えますけど。そういう聖霊のバプテスマという体験も大事かもしれないけれども、大事なことは、日々、常にどんなときもさつきのロマ書8章のいちばん初めの言葉、

「この故にもはや、キリスト・イエスに抱かれて在る者は、在らしめられて在る者は、罪に定められない。なんとなれば、キリスト・イエスの中に働いている生命の御霊の法が、あんたを、罪と死のあの肉の法則から解放したからや。御霊があんたの中に宿っていらっしゃるゆえに、あなたはもはや肉の人ではないよ。肉に支配されないよ」

と。それで行くことですよね。

●福音は万人のもの

福音というのは、決して、人間に無理難題を押しつけているものではない。万人が、人が人である限り、本来、神の子なんです。本来の神の子を神の子らしくしてくださいという福音なんです。それがどういいうわけかできなかったのが、生まれながらの「肉」というやつで、できなかったんですけれども。それを、もういちど、本来の在るべき姿に回復してください。

人というのは、霊が止まる（霊止）、神の霊が止まるのが人だという。本来の在るべきところに回復してください。そして、生命を賜わった。万人が、どんな人でも、およそ魂のある人ならすべての人にとって可能なもの。そうでなければ、福音ではない。特別な修行を積んだ人とか、特別に頭のよい人だとか、特別に何とかの人とか、そんなのは福音とは関係ないです。

「空気は万人が吸っている」

と、いつも小池先生は言われた。空気は万人が吸っている。しかも、意識しないで吸っている。無くなったら苦しくなる。3メートル級の山へ行ったらずいぶん空気が希薄になるようですけれども。1万メートルなんか行ったら大変なんでしょうね。海中を潜っている時も空気のボンベをしょっていくでしょ。でも、普通は意識しなくていいですね。意識しないで空気を吸ってます。空気を吸って私たちの体は生かされている。そのように、私たちの人間、霊的人間は御霊の気、御霊という気を絶えずいただいて吸って、そして、内なる人は生きている。恵みなんです。万人に提供していただいた恵みなんです。



●御霊の宿り、御霊の執り成し

ただ、それを「要らん」と言つて拒絶している人に対しては、御霊は慎み深いから、お入りになりません。

「御霊よ、来てください!」

と、自分の門戸を開いている人でないと、御霊はお宿りになりません。そこは、押しつけはなさいません。折伏はなさいません、待つていらつしやるけれどもね。呻いて待つてくださっているけれど。だから、そういうことで、

「すべて神の御霊に導かれている者は、みんな神の子なんだ」

と。しかも、神の霊というのは、人を恐れさせる霊ではない。

「アッバー、父よ!」

と――奴隷の霊ではない――親しげに、

「おとうちゃん!」

と呼べるように、

「主さま!」

と呼ぶような、そういう親しみの霊です。そういう霊をくださったんです。そして、御霊は私たちが神の子であるということをはつきりと証してください。

「子どもだつたら、天国を受け継ぐよなあ。世継ぎだ。キリストと一緒に世継ぎになるんだ。天国を受け継ぐ者だ」

と。だから、私はやっぱり天国へいっぺん行ってみたいです。そして、帰つて来たい(笑)。宇宙に行つて帰つて来る人もあるから。天国に行つて、「ああ、すごい」といつて帰つてきて、「こーやつたんや、もうほんまやで」

と言いたいわ。誰か体験してくださいよ。行きつばなしなら困るしな、それは。行きつばなしなら困るけれども、やはりそれを味わつて、そして

「ほんまやで。こんな聖書に書いてあることはカケラやで。向こうはどんなに凄い。か。光り輝いとるわ。生命にあふれているわ。愛が充ち満ちているわ。あそこに行つたら、もう帰りとうなくなるわ」

と。そういうことを我々は地上ですでに味わせていただく。それがこの集会なんです。だから、来ないではいられない。しかも、それをみんなで共に味わえるというのが、嬉しいじゃないですか。みんなと一緒に味わえる。一人でパクパク御馳走を食っているのではなくて、みんなと一緒に御霊のご馳走をいただけるというのが、本当に嬉しい。だから、

「兄弟姉妹よ」

ということになってくる。本当の意味での兄弟姉妹なんです。

「もうキリストと一緒に世継ぎだから、苦しみも一緒に受けるんだ」

と。そしてあとは、



「今の苦しみは……」

と言って、現在の苦しみのことを言ってくれています。

「今は本当にまだ完全な意味での贖い、^{あがな}全世界の贖い、自然界も含めた贖いはまだ終わっていないから、それが来ることを我々は待ち望んでいるのだ」

と。23節に、

「²³……御霊の最初の実をいただいた私たち自身も、やはりこの肉体というものと天上の世界というもののギャップに、やはり喘^{あえ}いでいる、苦しんでいる。

己^{からだ}が体の贖われんことを待っている」(ロマ8:23)

と。それは必ず実現する。必ず実現するものを、望みとしていただいている。

「信仰とは、望むところを確信し、見ぬものを真実^{まこと}とするなり」(ヘブル11:1)

と、ヘブル書にありましたね。目に見える望みは、望みではない。もう望む必要もないと。しかしながら、霊の目では見ているけれども現実にはまだ取得していない。それをじつと待ち望んでいる。

だから、私は、本当に奥さんに会いたいんですよ。まだ出てきてくれへん。M姉は(天に送った主人が)出てきてくれる? ああ、よく出てきてくれる? うちは出て来てくれへんや(笑)。そうか、ええなあ。

「²⁵……見ぬところを望まば、忍耐をもて之^{これ}を待たん」(ロマ8:25)

そのうちに出てきてくれるのか知りませんが、いや、出てきてくれへんうちに、私が向こうへ行ってしまうと、向こうで会うかもしれませんし。まあ要するに、望みということ。

そして、御霊が私たちを助けてくださる。この26節からが、また本当にありがたい言葉です。

「²⁶……御霊も我らの弱きを助け給う。我らは如何に祈るべきかを知らざれど

も、御霊みずから言い難き嘆^{なげき}をもて執成^{とりな}し給う。」(ロマ8:26)

祈りといっても、なかなか自分で祈れない。それを御霊が祈りを促してくださる。執成してください。そして、神様は私たちのことをしっかりとご存じで、御霊が取り次いでくださる。そういうことを言っている。

●すべてのこと相働きて益となる

この28節、

「²⁸……御旨^{みじめ}によりて召されたる者の為^{ため}には、凡^{すべ}てのこと相働^{あいはたら}きて益^{えき}となるを

我らは知る。」(ロマ8:28)

「どんなにマイナスと見えることでも結局はプラスになるのだ」

と。M兄弟はお体のことで随分苦勞して来られました。現にいろんな病気をまだ抱えていらっしゃるようですが、それらを通して、一切をプラスに転じてくださる。もしそ



れがなかったら、きつと、今のM君はなかったと思います。すべてそうです。皆さん、いろいろ味わわれて、マイナスと見えるところ、それは現在のプラスを与えんがために、それに気付かせんがための試練だということです。

『試練の中の希望』というのを、私は書きました。やはり人は、そういった地上にあるかぎりには、様々な試練、苦勞、苦しみ、悩み、^{かんなん}艱難がある。それらを通して——それでつぶされるんじゃない——その中をくぐり抜けて、すごい光の世界へと導かれていく。そのとおりだと思うんです。

だから、ある意味では、クリスチャンはいろんな苦勞をさせられます。それは、苦勞をさせたって、必ずそれ以上の素晴らしい姿に彼は変貌するということを、キリストはちゃんと見抜いておられるからなんです。途中でつぶれる人には、試練は来ませんわ。試練が来るということは、見込まれているんです。

私がかつて、私のおばにそういうことを言ったら、「そんなの、いややわあ」と言いました(笑)。でも、聖書は本当に、苦しみについていろいろな所で言っていますね。キリスト御自身が、

「あなたがたは、この世では苦難がある、苦しみがある、艱難がある。されど

雄々しかれ。我すでに世に勝てり」(ヨハネ16・33)

そう言つて、どーんと背中を押してくださっている。だから、逃げの姿勢じゃなく、真つ正面からぶつかって行く。中央突破していく。そこに勝利が微笑んでくる。そういう、たしかに戦いですよ。霊と霊との戦いなんですね。エペソ書の6章が言っています。

「血肉に対するものではない。闇の世の主権者、サタンの霊との戦いだ」(エペ

ソ6・12)

と。それには自分の力でなくて、御霊の御力で、常に預けていくことです。「自分で、自分で」なんて思わないで。

「主さま、あなたですよ。主さま、出番ですよ。何とかしてください!」

と。それをやっていたら、さつき私は三日間で原稿を書けたと言いましたが、これは、私は奇跡とは思えない。だから、みなさんも、そういうことで、人にはとてもできっこないと思うようなことだつて、日常生活の中で祈り心でぶつかって行つて、

「主さま、頼みますよ」

とやってたら、結果としてできてしまう。

「ああ、ありがたい」

という、そういう思いしかないんです、私は。

ですから、みなさんの日常生活が、主さまと本当に一つになれる場ですから。たしかに集会は素晴らしい。集会は、それが集結して凝縮された場です。けれども、集会だけで御霊に触れたり御霊を味わうのでなくて——日常生活の時間の方がはるかに長いわけですよ。



ここ（集会）はわずか2、3時間。ここは短い時間だけど——それがあとの6日プラス22時間ですか、そこに浸透していく。そのためにここでやっているわけですね。

私だって、日頃やはり一人ぼっちで淋しい時もあるしね。本当にいろいろありますよ。でも、この集会をやったら、本当に何か嬉しくなってくる。いやあ、兄弟姉妹ってありがたい存在です。人間ひとりでは生きられません。兄弟姉妹はありがたいです。

●キリストにしがみつく

「召されたる者には、すべてのこと相働きて益となる」

と。そして、我々をだんだん、だんだん、素晴らしい姿に変えていって、最後に光栄を得させ給う。だから、最後の凱歌ですよ。

「なんやねん、サタンのあほつたれが。誰が、神の選び給うたしもべたちを訴えるんや。キリストは、十字架で仁王立ちになつてくださっているんやで。キリストの蔭に隠れているあいつを捕まえようつたつて、無理や」

と（笑）。これがここに書かれていること。神が味方でいらっしゃるんだから——ということとは、キリストが味方でいらっしゃるんだから——敵なんておらんではないかと。ご自分の御子を全く惜しまずして、我ら一人一人のためにくださったんでしょ。そしたらもう、万物をくださるよと。

「³⁴誰が彼を訴えるんだ。誰が罪に定めるのだ。キリストは、神の右にいます。我らのために執り成し給うなり」（ロマ10・34）

と。キリストが——あの弁慶の仁王立ちですね、ああやって——

「責めるなら、おれを責めろ」

と言って、キリストが立ちはだかつてくださる。その蔭に、うしろに小さくなつてしがみついている。ようありますやん。ごつついお父ちゃんに小ぢやな子どもがしがみついて隠れている。そういうふうには、キリストが立ちはだかつてくださっている。

「あいつを責めるなら、わしを責めろ」

と。どんなものが飛んで来ても、みな跳ね返^はつていく。射るやつのところへ跳ね返つていくんです。そういう姿。

だから、私たちをキリストの愛から引き離せるものは何もない。何を持ってきてもだめだと。それが以下に書いてある。どんなものを持ってきても、苦難であろうが何であろうが、剣^{つるぎ}であろうが、霊的な何かであろうが、そんなものは全部、キリストは跳ね返して、私たちを絶対^{ぜったい}に、

「³⁹……キリスト・イエスに在る神の愛、そこから私たちを引き離す者は誰も
ない」（ロマ10・39）

と。こうやって読んできたなら、ロマ書の8章つて、すごく易しいでしょ。何も難しいこと、



あらへんでしょ。

●キリストを告白する

あとは、ごく簡単に、面白いところだけ拾い読みします。10章のところ、

「⁹あなたがたは、自分の口で、イエスは主であると言い表し、心で、神様は死人のなかからキリストを復活させてくださったということを信じるなら、救われる。」（ロマ10・9）

口で言い表す。キリストを告白する。そして、心の中では、

「神はキリストをご復活させてくださった」

ということを感じる。そしたら、それでいいと。

「¹⁰それ人は心に信じて義とせられ、口に言いあらわして救われるなり」（ロマ10・10）

確かに、信仰というのは内面的なものです。外から見えません。それを告白することによって、はつきりするんです。だから、キリストもおっしゃった。

「人の前で私を知らないという者は、私も、父の前でその人を知らないと言う

よ」（マタイ10・33）

「どんなに恥ずかしがろうが、不利益になろうが、はつきり告白すべき時ははつきりと言い表しなさい」

と、キリストは弟子達に言われましたね。この告白ということが大事なんです。

「我は福音を恥とせず」（ロマ1・16）

と、パウロは言いました。パウロの時代というのは、キリストは極悪人として処刑された犯罪者だった。それを救い主として告白するのは、どんなに大変なことか。今はもう、キリストといたらもう、「ははあつ」と畏れかしこむお方ですよ。

だから、この告白ということを皆さん大事にしてください。初めが大事です。初対面であろが、何であろが、

「あなたはどんな方ですか？」

と問われたら、

「職業はこれこれ。そして、内面的には、私はクリスチャンなんです。聖書直結の、新約聖書直結のクリスチャンなんです。教派は、ありません。」

これでいいんです。

「どこの教会？」

と問われれば、

「奥田昌道という変わり者に導かれている集会です」と。法律の方なら、



「奥田昌道って、あいつかいな？」

「はい、あいつです」

「へ」

それでいい。法律に関係していて私を知らなかったら、それは偽物ですよ（笑）。

その他の方でも、要するに、それだけでいいんですよ。カトリックとか、プロテスタントとか、そんなこと言わなくても、

「聖書に直結しています。聖書を血肉として喰らい、キリストにしがみついている。

そして、日曜ごとに聖言と祈りの集いをやっています。導いているのは、奥田昌道という、ちよつと変わり者で、80歳になっても大きなことばかり言っています。

108歳の人に刺激をうけて、あいつに負けんと言ってがんばっています。」

と。まあ、そういうふうには、楽しくおっしゃってくださいればいいです。教義なんて、言わなくていい。

「カトリックか、プロテスタントかなんて、そんなことは知りません。ともかく、キリストです。キリストオンリーなんです」

「へえ、そんな集まりもあるの？」

「ええ、よかつたらおいでください」

と。それでいいですよ。

●信仰は聞くことから始まる

それから次に、もうひとつ申し上げますと、13節、

「¹³すべて主の御名を呼び求むる者は救わるべし。

と書いてある。でも、

「知らん人間をどうやって呼べるんや？ その人を知らんのに、呼べと言っても無理や」

だから、やはり、伝える人が必要だと。

¹⁵……ああ美^{うるわ}しきかな、善き事を告ぐる者の足よ。

と、こう続くわけです。このようにして、17節、

¹⁷信仰は聞くにより、聞くはキリストの言による。

聞くというのは、キリストの言葉を聞くことで始まる。頭で考えるのとはちがう。

「聞くつて、何を聞くんや？」

「キリストの言葉や」

「わが言葉は霊なり、生命^{いのち}なり」（ヨハネ6・63）

それをしっかり受けとる。これが大事です。ところが、
「伝えたつて聞かないやつがたくさんおりました」



ということがここに書いてある。

16 ……イザやいう『主よ、われらに聞きたる言を誰か信ぜし』(ロマ10・13)

イスラエルは拒絶したけれど、本来はそうじゃないんだ。信仰というのは、聞くことによる。聞くことは、キリストの言葉を聞くことなんだと。

だから、私は、先ほど言いましたように、聖書直結です。聖書のなかのキリストの言葉、キリストを全身で受けたパウロの言葉、キリストが働いて書かしめられている使徒たちの手紙、そういうものによつて、私たちはキリストの言葉をしっかりといただいた。それでも、キリストの御姿が浮かび上がってくる。本当に浮かび上がってくる。

湖の上を歩いて来られたキリストとか、山上で変貌しておられるキリストの姿とか、ご復活の姿のキリストとか、それが何か彷彿として描き出されてくる。そういうキリストと私たちは結ばれているんです。これが10章です。

●主からの賜物を主のために

それから、12章に行くわけですね。きょうは時間が来ましたからそれ以上やりませんが、この12章以下は本当に素晴らしいところです。まず、3節からは、

「神様がキリストを通して我々に与えてくださっている賜物というのは様々なんだ。信仰の共同体、集会というのは、いろんな人がいる。それは全部違うんや。全部それぞれの役割も賜物もちがうんや。それをしっかりと認識しなさい」

「画的じゃない」ということをここで言っている。しかも、

「おのおの、自分を偉い者と思わないように」

ということを書いているんです。

「³われ、与えられし恩恵によりて汝等おのおのに告ぐ、思ふべき所を超えて^{みずから}自己を高しとすな。神のおのおのに分ち給ひし信仰の量にしたがい慎みて^{はかり}思ふべし」(ロマ12・3)

人は、ひとつの体に多くの器官がある。肢がある。手足その他、内臓とか、様々なものがある。そして全部、働きが違う。私たちも、集会というのは、いろいろな方々、バラエティに富んだ方々、それが結集して、ひとつのキリストの御からだを形づくっている。集会というのは、小さなキリストの体なんです。賜物は全部、この集会というものを活性化させ本当に命あらしめるために、また、伝道活動のために、それぞれ与えられた、そういう賜物です。信仰という賜物にせよ、勤めにせよ、教えにせよ、勧めにせよ、施しにせよ、全部それは主のご栄光のためです。そういうことのために、我々はこの集会に与えられている。皆さん、一人が欠けても困るんです。一人が欠けても困る。みんな尊い存在です。それはキリストさまが、神さまが召し集めてくださった。「召団」というのは、それなんです。



「召団」は、まあ、説明せんとわかってもらえない。電話で、

「我々は、キリスト召団つていいいます」

「へえ、『シヨウダン』つて、何ですか？ めされたるもの？ 手偏（招）ですか？」

「ちがう、ちがう、あの召集令状の召や」

「あつ、刀に口ですか？」

「ああ、そうや」

「刀の下に口」と、そう言わないと、相手には分からへん。

でも、「召団」というのは、神様によって召されたる者の集まりなんです。神によって召されたる者の群れ、団体。だから、「召団」というのは「エクレシア」、ギリシア語で、

「神によって召し出された者の群れ」

という意味です。それを「召団」と訳されたのは、藤井武先生だったようです。ご自分はそれを使われなかつたけれども、小池先生がそれを使われた。キリストによって召し集められた者の群れ。そして、キリストを喰らい、キリストを生きる。キリスト直結。ということは、聖書直結。これが我々の食物ですと。

「我が語りし言は靈なり、生命なり、我を食べろ」（ヨハネ6・63）

と。だから、時には、イザヤ書とか、エレミヤ書とか、そこにも素晴らしいものがあります。創世記も素晴らしい。でも、やつぱり、新約聖書を絶対に御自身の血肉としてください。結構これ（新約聖書）だつてポリウムがありますもの。これを本当に皆さんの血肉として——わからないところは飛ばしておいていい——自分の中にすうつと入ってくるものをしっかりと捕まえて行つてください。

「⁸或いは^{すすめ}勸をなす者は勸をなし、施す者はおしみなく施し、治むる者は心を^{あわれみ}尽くして治め、^{あわれみ}憐憫をなす者は喜びて憐憫をなすべし。⁹愛には^{いつわり}虚偽あらざれ、

悪はにくみ、善はしたしみ、¹⁰兄弟の愛をもて互いに^{いつく}愛しみ、礼儀をもて

相譲り、¹¹勤めて怠らず、心を熱くし、主につかえ、¹²望みて喜び、^{なやみ}患難にたえ、

祈りを恒にし、¹³聖徒の欠乏を賑し、旅人を^{ねんじ}懇ろに待せ。」（ロマ12・8～13）

このひとつひとつが重いです。ちやうど、コリント前書13章みたいな感じもします。

「兄弟の愛をもて互いに^{いつく}愛しみ、礼儀をもて相譲り

親しき仲にも礼儀あり。これは大事なことです。親子関係でも、夫婦関係でも、そうです。およそ人間が集まっているところ、どんなに親しくなったからと言って、やはりそれぞれを尊い人格として尊び、相譲るといふ、そういう謙虚さ、慎み。これがないと壊れていきます。

礼儀をもて相譲り、勤めて怠らず、心を熱くし、主につかえ

私も、こんなに熱く燃えるようになったのは最近ですよ。うちの奥さんが亡くなってから、余計に燃えるようになってきたんでしょうね、きつと。



12 望みて喜び、患難にたえ、祈りを恒にし、13 聖徒の欠乏を賑し、旅人を懇ろに待せ。

あの時代ですから、旅をするというのは大変な苦労だったから、その旅人を大切に。貧しいひとたちのためにパウロは献金を集めました。それから、

14 汝らを責むる者を祝し、これを祝して詛うな。

このへんが難しい。これができたら、本当に神の子ですよ。

15 喜ぶ者と共によりこび、泣く者と共になけ。

これは大事なことです。この世だったら、喜ぶ者に対してはひがみ、泣く者に対しては「ざましろ」と言う、これがこの世ですよ（笑）。そうでしょ。でも、福音は違う。喜ぶ者と本当に喜ぶ。「よかったねえ」と。そして、泣く者と一緒に泣く。痛みを分かち合う。

16 相互に心を同じうし、高ぶりたる思いをなさず、反って卑きに付け。なんじら己を聴しとすな。」（ロマ12・10～16）

●己を聴しとせず、すべての道で主を認める

この「己を聴しとしない」というところに関して、一箇所だけ、箴言の3章をお話して終わりたいと思います。私が主に導かれて最初にいただいた言葉で、この箴言の3章を非常に大事にしました。口語訳で読んでみます。

旧約聖書、箴言の第3章1節から12節まで読みます。

「わが子よ、わたしの教えを忘れず、

わたしの戒めを心にとめよ。

2 そうすれば、これはあなたの目を長くし、

命の年を延べ、あなたに平安を増し加える。

3 いつくしみと、まこととを捨ててはならない、

それをあなたの首に結び、心の碑にしるせ。

4 そうすれば、あなたは神と人との前に

恵みと、誉れを得る。

5 心をつくして主に信頼せよ、

自分の知識にたよってはならない。

6 すべての道で主を認めよ、

そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

7 自分を見て賢いと思つてはならない、

主を恐れて、悪を離れよ。

8 そうすれば、あなたの身を健やかにし、

あなたの骨に元氣を与える。



⁹ あなたの財産と、

すべての産物の初なりをもって主をあがめよ。

¹⁰ そうすれば、あなたの倉は満ちて余り、

あなたの酒ぶねは新しい酒であふれる。

¹¹ わが子よ、主の懲らしめを軽んじてはならない、

その戒めをきらつてはならない。

¹² 主は、愛する者を、戒められるからである。

あたかも父がその愛する子を戒めるように。」（箴言3・1〜12）

これはすばらしいと思いましたね。これは福音そのものですよ。私は、若い人から「何か言葉を書いてほしい」と言われたら、これを書いてあげたいと思いますね。このところ、3節から。

「³ いつくしみと、まことを捨ててはならない、

それをあなたの首に結び、心の碑にしるせ。

⁴ そうすれば、あなたは神と人との前に

恵みと、誉れを得る。

⁵ 心をつくして主に信頼せよ、

自分の知識にたよってはならない。

⁶ すべての道で主を認めよ、

「すべての道」なんです。「ここだけは私の領域」なんて作らない。学問であれ、職業であれ、家庭生活その他、経済生活であれ、事業であれ、すべての道で主を第一にする。

そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

⁷ 自分を見て賢いと思つてはならない、

主を恐れて、悪を離れよ。

⁸ そうすれば、あなたの身を健やかにし、

あなたの骨に元氣を与える。

⁹ あなたの財産と、

すべての産物の初なりをもって主をあがめよ。

「財産と産物の初なり」というのは、献金のことですね、今の言葉で言えば。すべて、そうやって報酬をいただいたのは神様のお助けがあつてのことだということで、その初なりを献げる。10分の1（申命記14・22、ルカ18・12）なんて決める必要はありません、気持です。

¹⁰ そうすれば、あなたの倉は満ちて余り、

あなたの酒ぶねは新しい酒であふれる。」

そうすれば、

「あなたの倉はあふれかえるよ、酒ぶねは新しい酒であふれるよ」



と。ここまでで結構です。あんまり懲らしめてほしくないから、ここまででいいですけど。これ、本当にいいでしょ、この生き方は。旧約聖書の中に、こういう素晴らしい箇所がある。これはソロモンの箴言ということになっていますけど、私にとっては、福音そのものでした。そんなことで、先ほどのロマ書に、

「己を聴しとするな。自分を賢いと思うな」

とありました。それにちなんで、箴言をご紹介した次第です。

それでは、これで今日のお話しを終わることにいたしました。じゃあ、お祈りをいたします。

● 祈り

主さま、今日もこうして、兄弟姉妹をお呼び集めくださいまして、ありがとうございます。主さま、まことにこの集会所の集会は別世界でございます。この地上の騒ぎをのがて、隔絶した世界がここにございます。

しかしながら、これが本当にあなたの生命の世界、あなたがご自身の血潮で我らを洗い、あなたの聖なる御霊を下さり、そして、

「この御霊の生命に生きろ、おまえたちの生くる道はここにあるぞ」

と、今日も、ローマ書を通して、あなたが切々と語ってくださいまして、ありがとうございます。あなたがあなたに従っていく道こそが本当の道、間違いない道でございます。そのことを我々はうちにいただいて、確信をもつて、日々を過ごしていくことができますように。

また、そういう我々の生き方を見て、周りの人たちが、

「なんとあの人はいつも輝いていることだろう、なんと喜びに溢れていることだろう、なんと平安であろう」

と、そういう姿を見て、本当にそう在らしめている主さまを讃美することができますように。

どうぞ、今病んでいる兄弟姉妹をあなたが強めてください。N兄弟を力付けてください。また、今日、この集會に集えなかった兄弟姉妹たち、また、ユーストリームを通してこの集會に参加している兄弟姉妹たちを、どうぞ、あなたの恵みの中におん顧みくださいますように希い奉ります。我々は希望から希望へと進んでまいります。どうぞ、これからもよろしく願ひいたします。

主イエス・キリストの尊き聖名を通し、この讃美と感謝と祈りを御前にお捧げいたします。アーメン。

